

情報社会、情報技術、情報格差など情報という言葉が氾濫している。この言葉は中国から導入された漢語のようであるが、明治時代初期に軍部が発行した『野外演習軌典』『陸戦条約』などに登場する日本で発明された言葉である。現在のところ明治九年に翻訳出版された『仏國歩兵陣中要務実地演習軌典』に登場する情報という訳語が最古とされている。

これは巧妙な言葉である。情報には二種の内容がある。第一は事務通信や制御通信のように社会の構造を維持する情報、第二は流行音楽や新聞記事のように多数の人間に共有され社会の状況を伝達する情報である。明治時代の翻訳が意図したかは不明だが、前者が「報」、後者が「情」と情報の二重の意味を統合した言葉である。

現在の問題は情報分野で日本が出遅れていることである。「報」の分野では、行政手続のオンライン利用率はOECD諸国で一位のアイスランドは八〇%近いが、日本は最下位の七%強でしかない。中学校での情報手段利用教育について五〇カ国の比率では、一位のデンマークが約九〇%であるのに日本は四九位の一八%である。

スイスの研究機関が毎年発表する世界六三カ国の情報社会の順位でも日本は一〇年前の二〇位から低落し、昨年は二九位である。この状況も反映し、より広範な項目を集計した国家の順位では、一九九〇年代には一位であった日本は最近では三〇位前後に低迷している。これらの数字は情報社会への出遅れを意味している。

「情」の分野の出遅れの一例はノーベル文学賞を受賞した作家の作品の言語である。一九〇一年以来、一一九名の作家が受賞しているが、日本からはわずか二名でしかなく、言語の比率では一位である。ヨーロッパ発祥の表彰制度であることを考慮しても、科学技術分野と比較して日本が劣勢であることは否定できない。

さらに最近では「情」と「報」を統合することの重要さが強調されるようになってきた。アメリカ政府は二〇〇六年に国力増進のためにSTEM(科学・技術・工学・数学)教育を重視する目標を設定したが、三年後にはSTEAMとA(芸術)を追加し、「情」の分野も兼備することが重要であるという方針に拡大している。

残念ながら、そのような時期から日本は反対の方向に転換するようになった。まずSTEMの段階では工学と理学の分野で博士課程に進学する学生が急速に減少しはじめた。二〇〇四年の五三〇〇人が頂点で、最近では三七〇〇名と三割も減少している。欧米諸国に比較して人口あたりの博士号取得者も半分以下である。

ここ数年、大阪医科大学と大阪薬科大学、東京工業大学と東京医科歯科大学の統合など大学の統合が増加しているが、いずれも理系の大学の統合であり、STEMが象徴するSTEM+Aの統合は登場していない。明治維新から一五〇年以上が経過した現在、巨大な変化をした世界への対応ができていないのが現状である。

工業技術の西欧との格差を自覚した明治政府は大臣の給与に匹敵する高給で外人教師を招致して高等教育を推進すると同時に、学制発布によって初等教育を充実してきた。その効果により日本は世界有数の工業国家へと発展できた。しかしSTEAM人材が社会を牽引する時代への対応は大幅に出遅れ、世界中位が現状である。根本からの改革が必要である。